横浜国大国語教育研究 No.46（2021）

巻頭言
～最後の和田坂日記～

横浜国立大学　髙木まさき

本誌は、本号をもって終刊となります。1994 年 4 月に創刊準備号が刊行され、年 2 回刊行の時期を経て 27 年間継続し、第 46 号をもって終了となります。副題を「最後の和田坂日記」とさせていただきましたのは、以前は、本誌刊行に際してＡ４一枚の雑文「不定期刊行物・和田坂日記」を添えてお送りしていたことによります。

本誌の題字「横浜国大国語教育研究」は、私の前任者であり、また分析批評の導入で国語科に大きな旋風を巻き起こした井関義久先生によるものと聞いています。井関先生は本誌刊行と前後して退官されましたので、実際の刊行は府川源一郎先生が定年の年まで約 20 年に渡り（途中から私と 1 号ずつ交替で）進めてこられました。府川先生ご退職後は石田喜美先生が尽力くださいました。またある時期までは、院生の皆さんが印刷と製本をしてくださった手作りの冊子でした。文字通り、院生の汗が染みついた思い出深い冊子の数々です。第 6 号の背表紙には、「弟六号」と「刻印」されているのも、懐かしい思い出です。現在は、横国附属図書館のリポジトリでの配信のみとなっています。

終刊の理由は、私の力不足も大きいですが、修士課程の教育学研究科が再編され、令和 3 年 4 月から一部は教職大学院（定員 15 名から 60 名に拡充）に、一部は新たな制度「学位プログラム」による先進実践学環（定員 42 名。国内最大）に院生も教員も振り分けられたことが背景にあります。意欲的な執筆者の中心でありかつ編集を支えてくれていた国語専門の院生がいなくなってしまいます。もちろん中高の国語の教員免許状をもった院生は教職大学院にも先進実践学環にも在籍予定ですが、従来と同じような意味において国語科にアイデンティティをもつ院生はいなくなります。教職大学院の柱である理論と実践の往還とは従来から言われてきたことで、私たちもそれを意識してきたつもりですが、制度として大きな変更を余儀なくされました。果たしてそれが最善だったのかという思いもありますが、危機感と疲労の度を深める教育現場や教育行政からは従来の教育学研究科は十分ではない、という根強い批判が大きなうねりとなって、全国の国立大学から教育学研究科は消滅していき、ほぼ教職大学院に統一されました。本学では、教育学研究科の中の大半を教職大学院が占めることとなり、定員は 60 名で教員養成の単科大学を除くと全国で最大規模です。定員充足できるか心配していましたが、この 4 月に入学してくる院生はちょうど 60 名で定員割れもせずに発足します。本学より規模の小さい教職大学院が軒並み定員割れに苦しんでいる状況を見ますと、従来の本学教育学研究科への信頼（定員 100 名にもかかわらず倍率が常に 2 倍以上という稀な大学院）を引き継ぐことができたことと、新たな教職大学院への期待が大きかったことが背景にあると思います。

本誌が刊行された時期は、1992 年前後のバブル経済の崩壊後、阪神淡路大震災（1995）、地下鉄サリン事件（1995）、神戸連続児童殺傷事件（1997）、アメリカ同時多発テロ（2001）、イラク戦争（2003）、リーマン・ショック（2008）、東日本大震災（2011）、熊本地震（2016）、中国ＧＤＰ世界第二位（2018）、新型コロナウイルス感染拡大（2020）、東京オリンピック・パラリンピック延期（2020）など歴史に残る出来事が数年ごとに起き、グローバル化と ICT の進展、国内外における格差の拡大、幼児教育から高等教育に至るまで様々な提言や試行錯誤等が繰り返された平成期（1989～2019）にほぼ重なります。

こうした種々の出来事の影響を直接間接に受けながら、府川先生を中心に本誌に集った皆さんの活躍は一定の役割を果たしてきたと思います。その後、石田喜美先生が参画され、先端的な課題意識や研究手法を用いて新たなパラダイムを切り拓きつつ縦横

に活躍してくださいました。その間、私も『他者を発見する国語の授業』（大修館書店）などの著書のもととなった原稿をいくつか本誌に掲載させていただきました。本誌は、研究発信の場であるとともに、院生・卒業生、県内教員の皆様方との交流の場でもありました。

さて最後になりますが、冒頭でも触れた副題の「和田坂日記」について。横国の南側の高台に、テニスコートや弓道場、サッカーグラウンドなどを擁する市営の大きな常盤公園があり、その先、相鉄線の和田町駅に向かって閑静な住宅街を下っていく坂道があります。それが通称「和田坂」です。坂道の両側に立ち並ぶ家々の庭からは季節ごとに美しい花々が咲きこぼれ、微かな香りを楽しませてくれます。と同時に、かなりきつい坂道なので、下りはともかく登る際には大変な難所となるので、多くの横国の学生・卒業生にとっては思い出深い坂道だと思います。

府川先生が在職の折には、夕暮れにその坂道を二人で下りながら、学生のこと、研究のこと、「長編の会」のこと、出版企画のことなどなど様々なことを語り合い、ふもとの和田町商店街で一杯やりながらその続きをやる、という実に贅沢な時間を過ごさせていただきました。この坂道がなかったら私の研究の深まりも広がりもなかったように思います。私が学部長になった頃から、そうした時間もなくなってしまいましたが。

その府川先生は、本誌刊行の際、毎回必ず「常盤台通信」という通信を発行していました。長く小学校教員を務められた府川先生には何でもないことだったかもしれませんが、元高校教師の私には、毎回発行する根気がないことは自明だったので最初から「不定期刊行物・和田坂日記」と銘打って、時々駄文を連ねては、本誌に添えて会員の皆様にお届けしていました。今思えば、倉澤栄吉先生など重鎮の先生方にもお届けしていたので、青ざめるばかりです。その不定期刊行物も書く機会がこれで完全になくなります。そこで本誌最終号の巻頭言の副題を「最後の和田坂日記」とさせていただいた次第です。

気がつけばなにやら定年退職の挨拶のようになってしまいましたが（まだ3年あります）、多くの執筆者の皆様、支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。皆様のお力添えにより、ここまで刊行することができました。改めまして御礼を申し上げ、本誌最終号の巻頭言とさせていただきます。

なお、本誌に注がれてきた院生や先生方のお力は、大学院の紀要である「教育デザイン研究」に向けられることになります。本学附属図書館からリポジトリで発信していますので、引き続き、こちらをご確認いただければ幸いです。

追伸

理事・副学長として、最後にご報告とお礼とを申し上げます。令和2年度はコロナ禍で、大変な一年になりました。令和3年度も予断を許しません。こんな厳しい状況下にあっても、横国生はがんばりました。ご指導くださった先生方の努力も尋常とは言えませんでした。もちろん精神面など様々な点で負担の大きな一年であったと思いますが、大学全体として退学・除籍となる学生は例年より少なく、就職・進学状況も例年に変わりません。理工系では学会等からの学生表彰も相継ぎ、教員も旧帝大をしのぐ巨額の研究資金を獲得したり受賞したりする事例が相継ぎました。国語科の卒論に限っても、例年以上に優れたものが多かった印象です。

大学も予算の組換えなどして学生支援には全力を尽くしましたが、卒業生や保護者、一般の方からの学生支援のためのご寄付は想定を遙かに超えて5600万円に達し（件数892件。2021年3月時点）、横国生を大事に思って下さる方の多さに改めて驚きました。今年も寄付したいとのお声も既に多くいただいています。そうした多くの皆様の思いを受けて、今後も横国生はがんばってくれるものと思います。

3月25日の卒業式・修了式は式典としては中止しましたが、授与自体は学内で短時間・分散化により行われました。ちょうど桜が満開で、感染防止に気をつけつつ、学生さんが記念撮影をしていたのが印象的でした。

入学式も中止しますが、4 月からは対面授業を実施していきます。いつでもオンラインに切り替える準備をしつつ、学びのコミュニティーとしての大学を再構築して参ります。

今後とも、横国生を温かく見守っていただき、様々な面からのご支援をお願い申し上げます。